

6月12日

茨木のり子 & 金澤翔子 二人の筆跡から学ぶ

THIS is ME, and YOU

二人の活動は、結晶での

転位のように、感動を産む！

二人の筆跡は、金属の結晶での＜転位＞と同じように、社会や世間を動かすエフェクトを持っています。＜転位＞とは、結晶へのクサビのような存在で、それは原子オーダーの小さなものです。茨木のり子の筆跡（詩情）と、金澤翔子の筆跡（書風）は、社会や世間への転位にも似たクサビのような、刺激と感動を与えてくれます。でも、これも、まだ小さな存在です。

❖図1は、金属を微視的に見た場合の結晶における「転位」を示しています。横に6個ずつ並んでいた原子の配列に、上から4列の原子列が中央にクサビのようにめり込んでいます。このような原子配列を刃状転位といいます。刃状転位は、逆Tの字の記号で示されます。

❖実は、クサビの（刃状の）原子列は、それより下の原子面上を交換して右に移動できます（図2）。これは、全体を一気に移動するよりも、局所的な移動なので低い力やエネルギーで可能です。これは、金属の変形における代表的な原理でもあります。

❖私たちの日常では、ジュウタンのしわの移動で体験しており、理解できることでしょう（図3）。

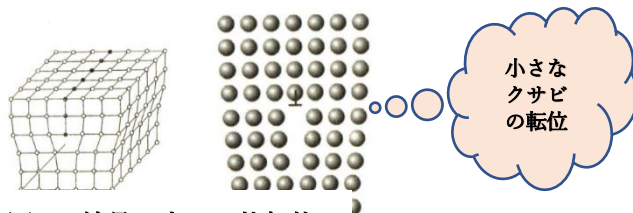


図1 結晶の中の刃状転位

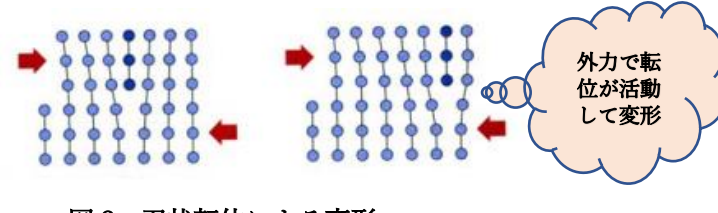


図2 刃状転位による変形

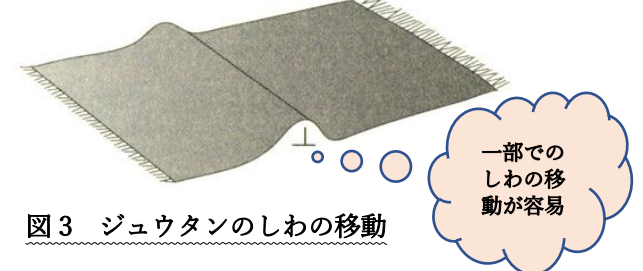


図3 ジュウタンのしわの移動

◇ 茨木のり子の誕生日は1926年6月12日。

宮崎洪（ひろし）と勝の長女。第二次世界大戦の終戦の年が19歳。学んだ薬学の道ではなく、天性や経験、そして出会いを表現し、のちに現代詩の長女とも呼ばれた。彼女の詩は、生きつづける。

その詩風は、感性に満ち、かつ厳しい。その矛先には、遠慮がない。今でいえば、忸度しない。その情感が、今の時代であるから重要視される。

誕生月である6月、とくに1960年6月は、34歳であったが、自身の学生時代を重ねた。高度経済成長&60年安保の時期にのり子もデモに出かけた。

茨木のり子は〈歲月〉にこだわった。春夏秋冬、季節の変化もある。大きな歳月は、時代の変化である。時代をどのようにとらえるか。作者ばかりでなく、読者自身も重ねて読み解きたい。

◇ ◇ 《作品例》秋、準備する、見えない配達夫、ぎらりと光るダイヤのような日、ジャン・ポール・サルトル、悪童たち、私が一番きれいだったとき、大学を出た奥さん、花の名、りゅうりえんれんの物語、四月のうた、兄弟、古潭、木の実、四海波静、足跡、食卓に珈琲の匂い流れ、さくら、時代おくれ、マザー・テレサの瞳、球を蹴る人、etc.

◇ ◇ ◇ 地と天のふしぎな意志の交歓を見た！／対話の習性はあの夜幕を切った。」どこかに美しいむらはないか／一日の仕事の終わりには一杯の黒ビール／・・・／どこかに美しい人と人との力はないか／同じ時代をともに生きる」怒るときと許すときのタイミングが／うまく計れないことについて／・・・／深遠な本でも／たったひとつわかっているのは／自分でそれを発見しなければならない」自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」

◇ 金澤翔子の誕生日は、1985年6月12日。

金澤裕（ひろし）と泰子の長女。いま、彼女は天才書家と呼ばれる。父親・裕は生まれた娘がダウン症だと医師から告知されたとき、神からの子として育てるとした。

母・泰子との二人三脚が始まった。5歳から始めた書道。般若心経の写経。10組も書き上げ、書道の基礎を獲得した。結果開花した才能。二十歳に銀座で個展。大反響となり、書道家・金澤翔子が誕生した。

今日まで、その筆使い、筆跡のインパクトは、激しい。カスレと勢い。白黒の紙と墨と筆のアート。翔子の姿はその時にあるが、作品はその時の時空心情を残し伝える。

◇ ◇ 《作品例》飛翔、共に生きる、華厳、雨ニモ負ケズ、平清盛、慈愛、愛、無、春、桜、風、星、心、笑、夢、etc.



◇ ◇ ◇ 《ダウン症候群 (Down syndrome)》1965年にWHOにより、最初の報告者であるイギリス人のダウン博士の名にちなみ正式名称とされた。通常21番目の染色体が1本多く3本あるため、21トリソミーとも呼ばれている。ダウン症候群の方は、筋肉の緊張が低く、多くの場合、発達に遅れがみられる。発達の道筋は、通常の場合とほぼ同じで、全体的にゆっくりと発達していく。出生頻度は1,000人に約1人の割合で、日本では1年間に約1,100人生まれていると言われている。0.1%は少ない。

『対話』

ネーブルの樹の下にたたずんでいると／／白い花々が烈しく匂い／獅子座の首星がおおきくたたいた／つめたい若者のように呼応して／／地と天のふしぎな意志の交歓を見た！／たばしる戦慄の美しさ！／／のけ者にされた少女は防空頭巾をかぶっていた 隣村のサイレンが／まだなっていた／／あれほど深い妬みはそののちも訪れない／対話の習性はあの夜幕を切った。

『夏の星に』

まばゆいばかり／豪華にばらまかれ／ふるほどに／星々／あれは蠍座の赤く怒る首星 アンタレス／永久にそれを追わねばならない射手座の弓／印度人という名の星はどれだろう／天の川を悠々と飛ぶ白鳥／しっぽにデネブを光らせて／頸の長い大きなスワンよ！／アンドロメダはまだいましめを解かれぬままだし／冠座はかぶりてのないうまに／誰かをじっと待っている／屑の星 粒の星 名のない星々／うつくしい者たちよ／わたくしが地上の宝石を欲しがらないのは／すでに／あなた達を視てしまったからなのだ きっと

『準備する』

〈むかしひとびとの間には／あたたかい共感が流れていたものだ〉／少し年老いてころないひとたちが語る／／そう／たしかに地下壕のなかで／見知らぬひとたちとにがいパンを／分けあったし／べたべたと／誰とでも手をとって／猛火の下を逃げまわった／／弱者の共感／蛆虫の共感／殺戮につながった共感／断じてなつかしみはしないだろう／わたしたちは／・・・／あるいはついにそんなものは／誕生することがないのだとしても／わたしたちは準備することを／やめないだろう／ほんとうの死と／生と／共感のために

『六月』

どこかに美しい村はないか／一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒／鍬を立てかけ 籠を置き／男も女も大きなジョッキをかたむける／／どこかに美しい街はないか／食べられる実をつけた街路樹が／どこまでも続き すみれいろした夕暮は／若者のやさしいさざめきで満ち満ちる／／どこかに美しい人と人との力はないか／同じ時代をともに生きる／したしさとおかしさとそうして怒りが／鋭い力となって たちあられる

『わたしの叔父さん』

一輪の大きな花を咲かせるためには／ほかの小さな蕾は切ってしまわねばならん／摘蕾というんだよ／恋や愛でもおんなじだ／小さな惚れたはれたは摘んでしまわなくちゃならん／そして気長に時間をかけて 一つの蕾だけを育ててゆく／でないと大きな花は咲かせられないよ／これこそ僕の花っていうものは／／夏休みに集まった小さな子らに／彼は弁じたてていた／ろくすっぽ聴いてもいなかった小さな子らの／何人がいま覚えているだろう／／光叔父さんは逝ってしまった 光りすぎたわけでもないのに／大輪の花はおろか 小さな花一つ咲かせずに／結核菌に たわやすく負け／三十五才の独身のまま／高名だけで手に入らないストレプトマイシンに憧れながら／／サン・テクジュペリを読んでいたら／狐がしゃべくっている／「あんたがあんたの一本のばらの花を／とても大切に思っているのはね／そのばらの花のために時間を無駄にしたからだよ」／／似たような考えが人間の頭をよぎるものだ／二人は座敷わらしとナルシサスぐらいに違っていたのに／サザン・クロスのした／一人のアフリカの少年の心に／いま ひらめいたかもしれない／同じような考えが／Le petit prince を読まなくたって

『わたしが一番きれいだったとき』

わたしが一番きれいだったとき／街々はがらがら崩れていって／／とんでもないところから／青空なんかが見えたりした／／／わたしが一番きれいだったとき／まわりの人達が沢山死んだ／工場で 海で 名もない島で／わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった／／わたしが一番きれいだったとき／だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった／男たちは挙手の礼しか知らなくて／きれいな眼差しだけを残し皆発っていった／／わたしが一番きれいだったとき／わたしの頭はからっぽで／わたしの心はかたくなで／手足ばかりが栗色に光った／／わたしが一番きれいだったとき／わたしの国は戦争で負けた／そんな馬鹿なことってあるものか／ブラウスの腕をまくり／卑屈な町をのし歩いた／／わたしが一番きれいだったとき／ラジオからはジャズが溢れた／禁煙を破ったときのようにくらくらしながら／わたしは異国の甘い音楽をむさぼった／／わたしが一番きれいだったとき／わたしはとてもふしあわせ／わたしはとてもとんちんかん／わたしはめっぽうさびしかった／／だから決めた できれば長生きすることに／年とってから凄く美しい絵を描いた／フランスのルオー爺さんのように／ね

『自分の感受性くらい』

ばさばさに乾いてゆく心を／ひとのせいにはするな／みずから水やりを怠っておいて／／気難しくなってきたのを／友人のせいにはするな／しなやかさを失ったのはどちらなのか／／苛立つのを／近親のせいにはするな／／なにかも下手だったのはわたくし／／初心消えかかるのを／暮らしのせいにはするな／／そもそもが ひよわな志しにすぎなかった／駄目なことの一切を／時代のせいにはするな／／わずかに光る尊厳の放棄／／自分の感受性くらい／自分で守れ／／ばかものよ

『握手』

手をさし出されて／握りかえす／しまったかな？ と思う いつも／相手の顔に困惑のいろ／ちらと走って／／どうも強すぎるらしいのである／手をさし出されたら／女は楚々と手を与え／ただ委ねるだけが作法なのかもしれない／／ああ しかしそんなことがなんじゃらべえ／わたしは わたしの流儀でやります／／すなわち／親愛の情ゆうぜんと溢れるときは／握力計でも握るように／ぐ ぐ ぐっと 力を籠める／痛かったって知らないのだ／ブルガリヤの詩人は大きな手でこちらの方が痛かった／老舎の手はやわらかで私の手の中で痛そうだった

『言いたくない言葉』

心の底に 強い圧力をかけて／蔵ってある言葉／声に出せば／文字に記せば／たちまちに色褪せるだろう／／それによって／私が立つところのもの／それによって／私が生かしめられているところの思念／／心の底に 強い圧力をかけて／蔵ってある言葉／声に出せば／文字に記せば／たちまちに色褪せるだろう／／それによって／私が立つところのもの／それによって／私が生かしめられているところの思念

『倚りかからず』

もはや／できあいの思想には倚りかかりたくない／もはや／できあいの宗教には倚りかかりたくない／もはや／できあいの学問には倚りかかりたくない／もはや／いかなる権威にも倚りかかりたくはない／ながく生きて／心底学んだのはそれぐらい／じぶんの耳目／じぶんの二本足のみで立っていて／／なに不都合のことやある／／倚りかかるとすれば／それは／椅子の背もたれだけ